

# 聴覚に障がいのある子どもの主体性のあらわれを ふまえた支援の在り方について

219215

土口 真奈

主指導教員 小松 孝至

副指導教員 水野 治久

## 1. 背景

今回私は、幼児期における子どもの「主体性」に着目した。幼稚園教育要領解説（平成30年）では「幼稚園において、幼児は多数の同年代の幼児と関わり、気持ちを伝え合い、ときには協力して活動に取り組むなどの多数な体験をする。そのような体験をする過程で、幼児は他の幼児と支え合って生活する楽しさを味わいながら、主体性や社会的態度を身に付けていくのである。」（pp. 16-17）と「主体性」という言葉が記載されている。これらの「主体性」とは、聴覚に障がいのある子どもにおいてどのようにあらわれるのであろうか。本校に在籍する子どもは聴力レベルや発達段階、語彙の獲得数にも違いがある。子どもが周囲の人や物、場所などどのような関係性を結び、「主体性」を表しているのかを考察する必要がある。

## 2. 研究の方法と結果

### 2.1 日々の子どもの行動や言動から“主体性”のあり方を見出す（研究①）

まずは日頃の子どもの様子から主体性のあらわれについて考えてみることにし、2021年5月～2021年7月の間、保育内容と子どもの行動や言動のエピソードをそれぞれ記録した。対象の子どもは大阪市内の聴覚支援学校の幼稚部に通う3歳児6名である記録の中から、記録者自身が子どもの「主体性」のある行動、発言と捉えたものを取り出しいくつかのカテゴリに分類した。1つ目のカテゴリは【子ども一人ひとりの気持ちや考えの揺れや高ぶり、戸惑い……変化の中から現れた主体性】と名付けた。2つ目のカテゴリは【身近な人との関りの中から現れた主体性】と名付けた。しかし、このカテゴリの子どもの行動や言動は目で見てわかりやすい行動や言動に注目して捉えたように感じる。川田（2019）が「主体性が弱いように見えるときは、子どもが新しい関係をさがしているときであり、あるいは、相手や環境と新しい関係を結びなおそうと試行錯誤している過程です。」（p. 39）と述べているように、目で見てはわかりにくい気持ちや考えのあらわのなかにも「主体性」と捉えられるものがあるのかもしれない。

### 2.2 定型的に繰り返される場面から考えられる主体性のあり方について（研究②）

研究①の結果をふまえ、明確な行動や言動以外も含む主体性のあらわれと教員の関わりとの関連を考察するために、日々の保育の中から定型的に繰り返される場面として給食を取り上げ、ビデオで記録し、観察を行った。対象の子どもは聴覚支援学校の幼稚部に通う4歳児12名である。ビデオ記録は6日間行い、おおよそ計5時間程度の撮影を行った。

ビデオ記録をとることで、目で見て捉えやすい行動（「食べる」「やりとりをする」）や発言だけでなく、川田（2019）が述べていた「主体性が弱い」と感じられる子どもの行動（「周りの様子を見る」）に着目することができた。そして給食という環境やその時間をともに過ごす友だちや教員の関わりが重要であるということが考えられた。

### 2.3 定型的に繰り返される場面から考えられる主体性のあり方と変化について（研究③）

研究②の結果をふまえ、4か月後の給食の時間を取り上げ、子どもの様子の変化や教員の関わりの変化を考察するために、再度ビデオで記録し、観察を行った。対象の子どもは聴覚支援学校の幼稚部に通う4歳児12名である。ビデオ記録は4日間行い、おおよそ計3時間程度の撮影を行った。

子ども自身のやりとりの幅が広がったり、給食の時間は食べるだけの時間ではなく、同じ場所に居る教員や友だちと関わりながら過ごす環境を私たち教員が作ったりすることで行動や言動に変化あると感じられた子どもがいた。また給食の時間やその環境と新たな関係性を結び、目的をもって過ごすことができるようになった子どももいた。またその給食の時間をともに過ごす私たち教員も子どもたちに食べるように促すといった行動は少なく、見守るという関わりを行っているようにも感じる。これは子どもたちの変化の1つの要因ではないかと考える。

## 3. 考察

私たち教員は子どもの「主体性」のあらわれを考える重要な存在である。子どもの行動や言動は一人ひとり違い、その時に感じている思いも違ってくる。川田（2019）が「子どもが新しい関係をさがしているときであり、あるいは、相手や環境と新しい関係を結びなおそうと試行錯誤している過程です。そこに保育的な援助の必要があらわれます。」（p. 39）と述べているように、教員の指導や支援は必要不可欠であると思われる。

今回の研究でも子どもたちの様々な「主体性」のあらわれを捉えることができた。子ども自ら物事に対して積極的に行動や言動を示す場合もあれば、物事に対してじっくりと時間をかけて行動や言動に表す場合もある。子どもの一人一人の実態に応じた関わりを行うことが大切であると考え。教員が積極的に関わるだけではなく、子どもの中で起きている変化に対して待ったり、見守ったりすることもときには必要である。そうすることで子どもの「主体性」が引き出されるのではないかと思う。関わりの中で、子どもの「主体性」を創り出すのではなく、引き出し、子ども自身で構築していくことを大切にしていきたい。